

《原著》

## 流産死産を経験した女性の産褥早期における 心理的プロセスの明確化

那波 潤美

椋山女学園大学看護学部

### 要 旨

【目的】流産死産を経験した女性の産褥早期における思いから心理的プロセスを明らかにする。【研究方法】対象者はA病院にて流産死産を経験し、産後外来を受診していた流産死産後1か月から2か月の女性のうち同意の得られた6名で、半構造化面接を実施した。妊娠期から流産死産後を産褥1か月から2か月の時点から振り返り、その思いを対象者が話す想起法をとった。面接内容を逐語録に起こし、分析方法は、質的帰納法を用いた。分析は、流産死産をした子どもに対する思いと流産死産をした後の自分に対する心の状態の2つの視点により分類し、分類した対象者の実際の語りに意味づけをし、意味づけした言葉の同意味を成す言葉ごとに集め、カテゴリ毎に名前を付けた。【結果】逐語録を1) 流産死産した子どもへの思い 2) 流産死産した後の自分に対する心の状態の2つの視点で、質的帰納法にて分析した。その結果、流産死産を経験した人は、1) 流産死産した子どもへの思いは、『子どもと出会って感じた愛情やいとしさ』『出産したことによって感じた母親になった感情』『子どものそばにいたい思い』『つらい感情に整理をつけたい思い』『子どもが生きていてほしい願い』の5つカテゴリ、2) 流産死産した後の自分に対する心の状態は、『自分自身を癒そうとする気持ち』『自分たちの決断に納得する気持ち』『自分を納得させようとする気持ち』『障がい児を妊娠したことを責める思い』『流産死産となった理由が分からないことへの苛立ちや悲しみ』『次の妊娠への不安』『抑うつ的な気持ち』の7つのカテゴリがあった。【考察】流産死産を経験した女性の思いは、子どもを亡くした辛い経験から立ち直り、感情を安定させることができる、自己を再生させる回復のプロセスであったといえる。また、看護職は、流産死産を経験した個々人が、何をどう感じているのかという思いだけを明らかにするのではなく、同時にその思いに至ったプロセスも明らかにして、それを大切にサポートしていくようなケアの方法が重要であると示唆された。産褥1か月から2か月の早期にある対象者の心理的プロセスにおいては、流産死産した子どもに対し「つらい感情に整理をつけたい思い」にたどり着くことによって、「自分たちの決断に納得する気持ち」を導きだしており、この2つの気持ちの段階に至るようにケアすることが癒しになると考えられた。

キーワード：流産死産，女性の心理的プロセス，質的帰納法